

諫早市総合教育会議議事録

平成29年度 第1回

平成29年度 第1回諫早市総合教育会議

1 日 時 平成29年8月23日(水) 16時00分～17時00分

2 場 所 諫早市役所 8階 会議室8-1

3 出席者 市 長 宮本 明雄
教 育 長 西村 暢彦
教 育 委 員 緒方 正親
教 育 委 員 秀島 はるみ
教 育 委 員 大石 竜基
教 育 委 員 宮本 峻光

4 会議に出席した職員

政策振興部長	西山 一勝
教育委員会教育次長	井上 良二
同 教育総務課長	田島 正孝
同 学校教育課長	福元 英典
同 生涯学習課長	村川 美詠
政策振興部地域づくり推進課長	田中 伸一
健康福祉部こども支援課長	中島 雄二

5 傍聴者 1名

6 議 題 意見交換

テーマ「地域で支える青少年の健全育成について」

～“地域の子どもは地域で育てる”好循環システムの実現に向けて～

○ 教育長

定刻になりましたので、これより平成29年度第1回諫早市総合教育会議を開会いたします。本日は傍聴者の方もお見えになっております。傍聴者におかれましては、ご静粛にお願いいたします。

では、初めに宮本市長からご挨拶をいただきたいと思っております。

○ 市長

みなさん、こんにちは。お忙しい時期にお集まりをいただきまして誠にありがとうございます。本日は、平成29年度第1回の諫早市総合教育会議ということで、開催をさせていただきました。

総合教育会議でございますけれど、平成27年の4月に地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正に伴い、市長部局と教育委員会との間の意思疎通を図りやすいようにするという趣旨で開催しております。そういった意味では従前の同じ法律の中に書かれておりました内容から一步踏み出したというような内容になっているということでございまして、それに基づき市の教育大綱も平成28年の3月に策定をしたところでございます。

西村教育長が5月に就任をされましたので、そういう意味では第1回目の総合教育会議になるのではないかなと思っております。これまでにも教育大綱についてや英語教育について、子どもの体力等について論議を進めてきたわけですが、今回は青少年の教育「地域で支える青少年の健全育成について」、「地域の子どもは地域で育てる好循環システムの実現に向けて」ということ、それから「子ども会」とか「放課後子ども教室」について論議をいただくということにしております。

色々な意味で団体生活が苦手な子が増えてきていると想定はされますけれども、現実では「地域の子どもは地域で育てる」というのはなかなか難しい部分があるだろうと思っておるところでして、今日の会議が有意義な会議になりますことを期待したいと思いますし、祈念を申し上げます。

諫早市には、社会教育という部分では熱心なお力添えをしていただける団体も多くございますし、個人も多いというのが特色の一つではないかなと思っておりますが、従来からある子ども会とか、従来からある地域の伝承という部分が薄れてきているのかなとも思いますので、今日ご論議を賜ればありがたいと思っております。

諫早市は、団体生活ということでいいますと、青少年自然の家もありますし活用できる施設等もたくさんあります。しかも、自然に恵まれておりますので

活動の幅を広げることにはできるのではないかなと思っております。

皆様の忌憚のないご意見を賜りながら、そして、拝聴をさせていただければと思います。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

○ 教育長

ありがとうございました。これより議事に入りたいと思います。先ほど市長から言っていたいただきましたように、今回のテーマは、「地域で支える青少年の健全育成について」ということで、諫早市の教育大綱にある表題でございます。それを考えるときに、そういうことに関わっている方たちは「地域の子どもは地域で育てる」という言葉をよく使われます。ですから、「地域の子どもは地域で育てる」というのは、具体的にはどのようなことだろうかといったところから入ってみたいと思います。一枚ものの資料に書いてあります協議の柱1の部分から、まずは「地域の子どもは地域で育てる」ということについて色々な想いを語り合いたいと思っております。

一つ目になりますけれど、「地域の子どもは地域で育てる」というのは、具体的にはどのようなこと、どのような内容だろうかということですが、身の回りで見られていることだとか、ご経験の中からこんなことだろうかとか、こういうことが大事ではないだろうか、といったご意見をお伺いできればと思います。もちろん、社会教育行政の子ども会にこだわらず、一般的なことも含めてお話いただければと思いますが、いかがでしょうか。

○ 宮本委員

私は昭和22年生まれですけれども、子どもの時を考えると、学校が終わってどこで遊ぶかというとき、学校で遊んだこともありますし、家に帰ってカバンほっぽりだしてきて地域で遊んだこともある。そういう時に親が常にいるかというやっぱりいないことが多い。親がいなかったら隣のおじちゃん、おばちゃん、前向かいのおじちゃん、おばちゃんの所に平気で入って行って、喉が渴いたとお茶を飲んだり、お菓子をもらったり、そういうことが当たり前のごとくできていました。ということは、今考えてみると地域で育てられていたのだなというふうに思います。もちろん褒められることもありましたし、怒られたこともあります。こっぴどく怒られて、家に帰ったら家でまた親に怒られて。そういうことが日常でしたので、それができればなというふうに思っております。

○ 教育長

近所付き合いといいますか、地域の中での家庭と家庭の関係は、もっと身近な近い関係にあったのでお互い遠慮なく甘えたり、子どもも甘えたり、地域の大人も我が子と同じように面倒を見てくれたり叱ってくれたり、そういう生活がありました。私もそういう生活をしてきたほうですから。だから、そういう部分で地域教育力があつたのだらうなということですね。

今のことも含めていかがでしょうか。

○ 緒方委員

私は、地域で生活している子どもを含めて他の家族、他者に対するの関心や興味を持つことだと思います。以前の家は鍵もかけない家が多かったし、縁側があつて通りにも人が多く、通りを行く子どもたちや家族の往来というのが家に居ながらにしてわかつたので、「どこに行くか？」という声かけも頻繁に行われていました。今、そういう住宅の環境というのも変わっていますし、車での移動も多いですから、どこにどういふ子どもたちがいるのかということもなかなか把握しづらい。ましてプライバシーですとか、個人情報というようなことが言われていますから、なかなか声をかけたり、ほかの家族に関わりを持ったりということが少なくなりつつあると思います。それをもう一回、地域の子どもに対するの興味、関心を持って関わっていくという気持ちを高めていく、取り戻すということから色々な取り組みに繋がっていくのではないかと思います。

○ 教育長

近所の子どもへの関心が薄れているのではないかと。声かけとか色々なことも昔は多かつたけれど、まずはその関心を取り戻すということから入らないと、地域の子どもを地域で育てることにはならないということですね。

いつ頃からでしょうか。だんだん関心が薄れてきたのは。

○ 大石委員

三世代で住むというところから核家族になってきて、かつ、その途中で個人情報云々ということが出てきて、先ほど緒方委員の話に出ていましたが、地域の人でも子どもに、近所の子どもだろうと思って声をかけたら、知らない人と話してはいけないと親から言われている、先生から言われていると。逆に、知りたくても知り得ないというのが現状としてあるのではないかなと思います。

だから、環境自体が変わってきたので、地域みんなが子どもを育てることが昔のやり方ではできないので、今の時代に合った施策をとりおこなっていかなければならないと思っています。

○ 教育長

子どもに不審者対策の教育をすることが、人間不信教育になってしまっているというところがあってですね。

○ 緒方委員

どちらかというところ、そちらのほうが先行していて、近所のおじいちゃん、おばあちゃん、おじちゃん、おばちゃんたちに挨拶をしましょうとか、一緒に遊んでもらいましょうというようなことは慎まれているような状況ですね。事件がある度にそういうことが問い直しをされますから、そういう風潮がどんどん広がっている気がします。

○ 宮本委員

不審者対策のためには、隣近所がしっかり挨拶を交わしているところが良いのですよね。空き巣狙いとか泥棒は、町内、近所同士で挨拶をしているところは素通りしてしまうと言います。そういうメリットの部分がおき忘れられて、個人情報流出だとか噂話にのぼるとか負の部分ばかりが意外と強調されているのかもしれない。

○ 教育長

確かにそうなんですよね。最近、地域で子どもを守るネットワークができる時に、とにかく挨拶から初めよう、みんなが挨拶をしているところほど不審者は入り込みにくいということがよく言われます。でも、何故か良い部分をおいて、危ないから変な人に付いて行ってはだめよとか、声をかけてもだめよと言ってしまうのです。それを乗り越えて今の時代に合った違う方策というものを考えないといけないということですね。

○ 大石委員

その中であって、子ども会というのは一つの手段、ツールとしては非常に重要なのかなと思います。ただ、うちの地元の数字なんですけれども、十年前からすると200人のところが20人、90人のところが15人というふうの子

ども会への参加が目減りをしています。だから、昔の子ども会の運営でなく、今の環境に合わせた子ども会の作り方に変えていかないといけない。では何故減ったのかといたら、やはり親の負担というのがある。どうしても、役員等をすると休日も子ども会にはまっていけないという問題が挙げられますので、地域、例えば地域の老人会とか、学校の先生で引退されている方、教育に従事されていた方が子ども会の運営を手伝っていただけたら非常にいいのかなと。また違った形で子ども会が再生できるのかなと思っています。

○ 教育長

子ども会を一つの例として言っていたきましたが、親がなかなか難しいのであれば地域で背負ってみてはどうなのだろうと、そういった新しい考え方も必要ではないかということですね。時代に合わせた施策があると。このような状況の中で、新しい方法等を考えながら地域で育むという方向に持っていくべきだろうと。

原点に戻していくと、なぜ地域で子どもを育まないといけないのか。地域で子どもを育むことによって、子どもたちにとってどういったことが育っていくのだろうか、地域にとっては何かいいことがあるのだろうか。地域の子どもは地域で育てることのメリット、その辺はどうでしょうか。

○ 緒方委員

うちはお寺でもありますのでお葬式があったりするのですけれど、亡くなったおじいちゃんには子どもの時に世話になった、色々なことを教えてもらったと親戚でもないけれども、恩義というかお礼がしたいというような気持ちでお参りをするという方も随分いらっしゃいます。釣りを教えてもらったりだとかカエルの取り方を教えてもらったりだとかすると、自分が生まれ育った郷土に対しての愛着というものが育っていくし、その人に対しても感謝の気持ちが生じてくる。それが地域での子どもの育成がもたらす成果のように思います。

○ 教育長

地域の人や地域自体への愛着といったことでしょうかね。

かなり愛着の強いところにお住みだと思いますが、秀島委員はいかがでしょう。

○ 秀島委員

私の地元は先ほどお話しが出ていた子ども会もほぼ100パーセントの加入で、ただ、活動自体が充実しているかというところ、その数字イコールではないところもあります。昔の自分の頃の時代を考えると、子どもたちが主体になって運営をしていました。運営・企画をして、5、6年生の高学年の子どもたちが低学年の子と一緒に色々な企画をして運営をするということで、社会性というものを身に付けていた部分はあると思います。でも実際に今の子ども会の運営が子どもたち独自でなされているかというところ、そこはちょっとクエスチョンで、自分のところの地元の例をとってみても、どうしても保護者主導で行事をこなすことが主で本末転倒となっていて、実態は変わってきてしまっているところはあるなという印象があります。

○ 教育長

まだまだ良い地域の環境が残ってはいるけれども、本当に子どもが地域で育っていく部分が保証されているのかと、方法論として、運営のあり方として、ということですね。

大分具体的に子ども会のことに入りつつありますけれども、そのことは後で詳しくやっていくことにして、地域の子どもは地域で育てることによって、子どもとか人々が、人や地域に愛着を持つというメリットがあるということでしたけれど、もう少しこのことによるメリットというか、例えば、地域で育てられている子どもというのは、学校で育つものとは違うものが育つ、学校教育で育つものと違うものが育ちます。地域の中で育まれることによってですね。先ほど、地域の大人から声をかけられてという話もありましたが、その辺はどうでしょうか。

○ 大石委員

地域の子どもは地域で育てるということは、結局、地域の子ども、1年生であれ3年生であれ6年生であれ違う学年と知り合える。当然、同学年も知り合えるのですけれど、そういうことによって先ほども出てました防犯等にもつながっていくし、例えば、お祭りのお手伝いでもいいし廃品回収でもいいし、そういった活動が行われていくようになると、先ほど市長がおっしゃった団体行動の良さとかいうのも育っていくだろうし、メリットというのは大いにあるのかなと思います。

○ 教育長

子どもというのは、基本的に同学年、同級生の中で育つ。それが今おっしゃったように異年齢、年齢の違う学年で行動することにより、違う育つ部分があるのだらうなということでしょうね。地域を愛するようになる。学校教育とは違う部分で育まれるものがあるなということですね。

これまでの話の流れの中で、市長が思われることはありますでしょうか。

○ 市長

私はアパートを持っているのですが、最初、契約をするときに特記事項として自治会に入ってくださいということが契約書の中に書いてあります。これを守っていただかないと入居ができませんと。最初は入っていただけるのですが、子どもが大きくなって5年生とか6年生になると、子ども会の指導者、子ども会の役員にならないといけないので町内会を辞めさせてくださいというふうになって、それを止めることは非常に難しいのですね。だから自治会の加入にも影響をしてくる。逆に言うと、子ども会の活動がなければ、そのまま自治会には加入していただいていたかもしれない。ですから、子どもたちは高学年になると子ども会の中ではリーダーになりますから、そういう意味では良い体験ができるのではないかと思うのですが、それが保護者の負担になってしまう。どの程度の負担なのか実態はよく分かりませんが。

子どもを地域で育てるということは、みんなで子どもたちを、自分の子どもも近くの子どもたちも同じような目で見れる人材作りというか、そういうものが重要だと思います。昔は家の中で遊ぶ遊びというのが非常に少なかったのですが、今の子どもはゲームもありますし色々なものがありますから、同学年で集まって家で遊ぶという状況が顕著になってきているのではないかなと思います。そういう現象の中で地域の子どもは地域で育てるということは、なかなか難しい課題であると思います。しかも、先ほど大石委員がおっしゃったように、核家族化ということがあって家にはお父さんもお母さんもいない。特に最近はお母さんもお仕事に行って、その結果が学童クラブなどの人が非常に増えているという傾向にありますから、そういった中で本当は昔以上に地域で育てるということは大事なことだと思うのですが、それが構築できていないというのが現状かなと思います。

○ 教育長

ありがとうございました。育ってる子どもたちを見ても、昔以上に地域で育

てることが必要なのだろうなというふうに思うのですね。

私の長男が、5歳の時に家のすぐ目の前で交通事故に会いまして、1～2ヶ月入院しないといけないこととなり、生まれて半年くらいの弟がいたのですが、近所の方が母である私の妻に、「預かるよ、子どもは。病院に行っておいで。何日でも預かっていいよ」と言ってくれました。そういう連帯感がどんなに心強くてありがたかったか。そうすると自分たちも同じように、地域の子どもたちにはそうしてあげたいと思うようになりますよね。そういった関係が薄れてきているというこの時代だからこそ、今おっしゃったように、地域で育てるということについて考えていけないのかなというふうに思います。

だんだん子ども会のことを語り合うべき内容になってきていますが、その前に「地域の子どもは地域で育てる」ということについて、どのような意義があるのだろうということを資料の方にまとめさせていただいています。

資料、開けて1ページをご覧ください。諫早市の教育大綱を受けて「地域で支える青少年の健全育成」、地域の人々とのふれあいや社会体験云々という部分を具現化するために「地域の子どもは地域で育てる」意義を三つに分けて整理して試しています。生涯学習課長からこのことについて説明していただければと思います。

○ 生涯学習課長

「地域の子どもは地域で育てる」ということを社会教育行政の立場で捉えると、大きく三つの柱があるのではないかと考えております。

一つ目は「子どもの健全育成」です。少子化とか核家族化、地域において人と人の繋がりが薄くなってきたことで、子育ての家庭が孤立をして親自身も身近な人から子育てを学ぶ機会がない、子どもたちも異年齢の仲間とか地域の大人と関わりが持てず心や体を鍛える機会がもてない、結果としていじめとか不登校とかいった問題が減少しないという現状があると思います。

子どもの生きる力とか知恵とか体力や人間関係力、そういったものを育てるために地域総がかりで子育てをしていったらいいのではないかという、まず子どもの視点からです。

二つ目が「地域づくりとしての意味」です。小さい頃に地域の川とか山とかで遊んだ子ども、地域の大人に関わってもらいながら育った子どもたちは、地域に愛着をもち将来地域を担う人材となってそこでまた地域の子どもたちを育てていく、そういった好循環システムを作り上げるための仕組みであると考えております。また子どもを通して近所付き合いすることで、近所の人たち同士

の顔が見えるようになるという効果もあると思います。

三つ目が「生涯学習」の面です。地域の大人、特に高齢者の出番としての意味です。昔遊びとか見守りというだけではなくて、現役時代のスキルとか経験、人間力を活かして誰かのお役に立つことが高齢者の喜びや生きがいに繋がるといえるものです。

西諫早小学校の通学合宿などを見ていると、年に1回もらい湯に来てくれる子どもたちを楽しみに待っておられる高齢者のご家庭があったり、自分の孫にはなかなか会えないので、そういう機会に近所の子どもから挨拶してもらえて嬉しいというお声であったりもお聞きしています。また、学校の図書ボランティアをされている方で、地域の子どものためと思って始めた活動だったけれども、今は自分が子どもたちに元気をもらっているというような感想をお持ちの方もいらっしゃいます。

以上が、地域で子どもを育てることの意義とか価値であるのではないかと、いうふうに思っております。そのための具体的な取り組みとして、子ども会、放課後子ども教室、通学合宿、学校支援会議、地域の行事への子どもの参画などの5点を挙げております。以上が基本的な考え方です。

○ 教育長

先ほど、具体的に分かりやすい言葉で話をさせていただいて、その部分も含めて、全て含みきれていない部分もありますが、一つ目が地域の子どもの地域で育てられることによって子どもに育まれるものは、学校教育と違ってこういう部分が育てられるのではないかと、最後に人間関係力というものがありますけれども、色々な生きていく上での力といったものがあるのではないかと。

二つ目は、地域づくりとして意味として「好循環サイクル」という言葉を入れてありますけれども、地域で育まれた子は地域に愛着を持ち、将来大人になった時にやはり地域作りに貢献する人間となっていくのではないかと。逆に言うと、地域に関わらずに育った子は地域のために何かする大人になれるのだろうかということですね。

最後は、いかにも生涯学習課らしい考え方ではありますが、高齢者の方たち、といっても前期ぐらいになるんでしょうか。65歳から上の75、6歳ぐらいまでのお元気な方はたくさんいらっしゃいますけれども、先ほど話にでていたように子ども会とかを自分たちで運営したことがあるような方たち、学校の先生とか地域の方が子どもたちのために動いていただくことで、高齢者の喜びにもあるのではないだろうかといったことですが、このまとめ方についてはいかが

でしょうか。こういうことも足りないのではないかと、これは本当にそうなのかということをございませんでしょうか。

○ 宮本委員

先ほど市長もおっしゃいましたけれど、子ども会に入ると役員が回ってくる。それが嫌なのだとということで、今、自由主義とか個人主義とか何でも平等にしようという平等主義が言われてますけれども、私は去年こういう役をしたので今年はしなくていい、今度はあなたの番よと。そういうことにすると個人によっては非常に苦手な人もいます。

昔のことを考えると、そういえばあのおじちゃんは何年も前からああいう仕事をずっとしてるとか、あのおばちゃんはずっと役員してるとか、そういう方がおられましたよね。現役のときのスキルというものを活かされる高齢者、そういう方たちに少し任せてやっていけばいいのではないかと思います。それに現在の社会では、どうしても予算、お金がということがありますので、そういうところに少し使っていただけると、そういう活動をしているお年寄りにはぼけるのが絶対に遅くなりますので、元気な上にぼけるのも遅くなると医療・介護費も安くなる。そう考えると子どものためにもなる、ぼけ防止にもなるという活動がたくさんあるのではないかと思います。だから是非、親だけを利用するのではなくてリタイヤした人たちをどんどん活用していただければ、保護者の負担感を少しは解消できるのではないかと思います。

○ 教育長

地域にはフォローできる人材がいるということですよ。その人材を活用させていただいて、子ども達の活動をフォローしていただく。そして、それが回りまわってその方自身の生きがいや健康にもつながっていくのではないかと、後で出てくる方向性みたいなものが見え始めてるのではないかと、う気もしてきました。

他にこの分け方の中で何かございますでしょうか。大体このようなまとめ方でよろしいでしょうか。

では、こういう基本的な考え方に基づいて具体的な取り組みをする。つまり子ども会であっても子ども教室であっても通学合宿であっても、このような考え方になると。子どもが育まれるのはこうであって、そのことによって地域づくりといったものも行われているし、高齢者に関わっていただければそうなるのではないかと、もっていけるようにそれぞれの取り組みを考えていく。全てが

全てそういくかどうか分かりませんが、そういったものを基盤としながら考えていこうかということになっていくと思います。

実際に今後の課題として挙げてあります「子ども会」についてとなっていくわけですが、社会教育というのは人づくりであり、地域づくりであります。ですから、子ども達が健全に育ち、大人もいきいきと生きがいを感じているという、人づくりが地域づくりになるというときに、この「地域の子どもは地域で育てる」という考え方ですから、子どもを核とした温もりのある地域づくりという事を目指して、それぞれの事業を考えていこうということでございます。

そもそも子ども会とは、といったことを確認しながら一緒に考えていきたいと思えます。

子ども会について説明をお願いします。

○ 生涯学習課長

資料に子ども会の加入者数・加入率一覧を記載しています。これは、市の子ども会連合会に加入している子ども会の会員数なので、正確な数字ではないのですが、皆様ご存知のように現在子ども会の加入率はここ十年すごく低下をしております、高学年になると親の負担感から子ども会を辞めさせられてしまうというような現状があります。特に市の中心部の学校の加入率が低くなっております。

子ども会は子どもの異年齢の活動の場であって、親以外の地域の大人に関わってもらえる場、話し合いや触れ合い、助け合い、競い合いをする中で子どもたちの人間力を育てる場です。また、地域の大人が繋がる場でもあります。今は子どもの自主的な活動ではなく、親が企画・運営をする会になってしまっているという現状もあります。親が一生懸命焼きそばとかを作り、子どもは食べるのを待っているだけということもあつたりして、その負担感から参加者が少なくなっている、子どもにとっての魅力ある活動でなくなっている、結果子ども会のメリットである異年齢の活動などができなくなっているという負の流れになっているというところがあります。原因としては、共働きの家庭が増えて行事に出られないとか、子どもがクラブで忙しいとか、地域の繋がりがなく個人情報とかの関係で対象になる子どもたちがどの家庭にいるのかが把握できていないとか、そういった事情があるとも考えられますけれども、子ども会の本来の価値、子どもの成長にとってとても大事なことですよということが伝わっていないこと、自治会とか親もそういったことに無関心になっていることが大きいと考えられます。

これからの子ども会をどうしていけばいいのか、私たちにできることは何なのかということについて、家庭教育とか地域教育の課題も含めて今後のテーマについて、意見交換をしていただければと思います。

○ 教育長

私が、我が子の子ども会のお世話をしていた頃からか、その後ぐらいから「子人会（ことなかい）」というものがありました。子ども会を大人が運営してすべて大人が仕切るから大人と子ども、子ども大人の「子人会」。これは子どもの自主性という部分が欠落していて、さあこれで遊べ、焼きそばを作ってさあ食べるというものでした。本来は子どもたちが年間計画、夏休みにここでスイカ割りしようよとか、クリスマス会をしようとかいう計画を立てて、それをするためのお金が会費だけでは足りないので自分たちで廃品回収をするということから始ったことが、だんだん行事化していくような形に変わっていく。でも、自主的にさせようとするのとたくさん時間がかかって、だんだん大人が全てを準備していくような会になっていってしまう。

もともと子ども会というのは、戦後子どもたちが荒れた生活をしているのを何とか健全に育てようということ、子ども会というものが地域で作られ始めて広まっていった。長崎県では昭和22年でしたか、一番初めに子ども会が長崎市にできたという歴史があります。

メリットや課題が出てきてきましたけれども、先ほどおっしゃっていただいたことも含めて、この課題をどうしていくかということについてお考えを聞かせていただければと思いますが。

○ 大石委員

今、生涯学習課長から説明があった中に、子ども会の良さを分かっていないという部分がありましたが、教育委員会や行政が子ども会の良さというのを噛み砕いて伝えられているのかということも問題だと思います。子ども会に入らないことの理由の一つに、子ども会に入ることの良さがわからない、メリットがないというのが少なからずあると思うのですけれど、子ども会はこういったところ、入っていたらこういうところが良いのですよと、小学校入学前のお母さんたちに噛み砕いて教えられているのかなという気がします。悪いところばかり先輩のお母さんやお父さんたちから聞いているから入らないという部分もあるし、先ほど市長がおっしゃった自治会との兼ね合いもあって、子ども会の役員をしていたら自治会のお手伝いまでさせられるというデメリットがある。

そういったところも自治会と一緒に共々負担軽減という部分では考えていかなければいけないところかなと思っています。

○ 教育長

自治会共々考えていくというのは。

○ 大石委員

例えば、子ども会の役員になった人は、この祭りは強制的に来て下さい、自動的に役員のお手伝いをする事になっているのですよ、というような昔ながらの考え方はやめたほうがいいのではないかなと。それぞれの運営の仕方があるとしますので、一概には言えないのですけれど。

○ 教育長

要するにただでさえ負担があるのに、余計な負担まで増えてくるということ。まずは子ども会の良さが伝わっているかということですね。

○ 宮本委員

これは突拍子のない、今までの意見と関係のないことかもしれませんが、ITが進んできた社会で失われたものはどれだけあるかということに少し目を向けてほしいと思うのですね。先ほど市長からお話が出ましたけれども、子どもは自分の好きなゲームに没頭する。しかも、それは子どもたちが集まってさえもそれぞれがゲーム機を持ち寄って、それぞれが自分のゲーム機で遊んでいる。お互いに何しているか、何も話もしなくて時間になったら家に帰らないといけない。それは子ども同士の遊びなのか。違いますよね。

一方、母親のほうを見ればスマホを見ながら授乳をしている。赤ちゃんはお母さんの目を探しながら、目は見えないんだけども生まれたときからお母さんの匂いを嗅ぎながら、お母さんの目を追っているんです。しかし、母親は赤ちゃんを見て授乳せずにスマホの画面を見て授乳している。そういうところで、何か生物としての基本的なものを忘れてきている。そういうことは決してプラスにはならないということを、もっと乳幼児の時代のお母さんに教えていきながら、子どもにとってもマイナスだという広告宣伝ですね、それも一貫して続けてしていかないといけないのではないかと思います。

○ 教育長

神社に子どもが5、6人集まっているなどと思ったらみんなゲームをしてるんですね。また、ある場所に集まっているなどと思ったら、その場所がW i f i（ワイファイ）があるところで、W i f iが入りやすい場所に集まっている。だから、仲良く集まっているみたいだがW i f iを求めて集まっている。そうやって失っていったものがあるということ、子ども会の良さとして併せて対比する形で示すことも大事ということですよ。

○ 緒方委員

子どもたちが自主的に運営するということは、地域ではなかなか難しいと思うのですね、地域という場所ですけれど。学校でそれができないのかなというふうに思います。忙しいカリキュラムの中で時間を作るのは難しいかもしれませんが、1学期に1、2時間程度、何々町の子どもたちはこの教室に集まってくださいということで、子どもたちが考える町内のハザードマップだとか自分たちの町の名所だとか、昆虫、カブトムシとかクワガタの採れるところとか、学校の中である程度先生たちが指導をして6年生から1年生まで集まってそういう会をもつと、なかなか地域の公民館とかではできないことでも学校には既に集まっていますから、そういう機会を利用して子ども会活動を学校の中で育成をしていくということも方法としてとればよいなと思います。

○ 宮本委員

私は、今の緒方委員の意見とはちょっと違う意見です。学校の中というのはどうしても学校の先生が中心にならざるを得ないので、先生たちの負担が今以上に増えてくる。それよりは、先ほど生涯学習の部分にあった、近所の、その地域の、それなら私がやっていたよという人たちを中心に動きながら、場所としては学校を使ってもいいですよというような運営の仕方ができれば。もちろん学校の先生が加勢してもいいですよということであればそれは加勢してもらってもいいですけど、学校の先生中心にというよりは、それができる大人を作っていく、教育委員会の生涯学習課で育てていく、ということを中心にしてながら学校を利用するということがいいのではないだろうかと思います。

○ 緒方委員

全部を学校の先生にお願いしようというのではなくて、取っ掛かりですよ。スタート地点としては、学校の先生のほうがまとめやすいのではないかと

ことで、大人がするというよりは子どもの自主運営であれば、地域の大人の方の関わり方というのもある程度制限をしておかないと、やっぱり大人がお膳立てをするということになるので、その辺のバランスも必要じゃないかなと思います。

○ 宮本委員

子どもたちを教える場合に大人がリードしていても、実はリードしているのだけれども自分ではあまり表に出ずに、子どもだけにやりなさいとうまくリードできる大人というのはいますよね。そういう子育ての上手な大人の人を利用して、それができる大人を育成していく。そして、その人たちに実際にやっていってもらう。だから、子ども会のリーダーとして非常に有用な大人を育てるというのも、一つ教育委員会の役割じゃなかろうかというふうに思います。

○ 教育長

緒方委員がおっしゃった地域ではなかなか子どもたちに自主的に考えさせるのも難しい部分があると。だから学校ではどうだろうかと。一方、学校はいいけど、先生の負担はいかなものかというご意見かと思います。

ここで結論を出すわけではありませんので、二つともありがたいご意見だと思っていますし、そうなるキーマンとなる大人が必要になってくるということですね。そういう大人を育てることも社会教育的に生涯学習課の仕事ではないかということですね。ありがとうございます。

先ほどから、親がそれだけ無理があるようならば、地域の大人、リタイヤしたけど元気な、そういう人たちが関わってくればいいのではないかと、この議事に入る前から言われていたことですから、それについては皆さん同様のお考えだというふうに思ってます。

その人たちが、具体的にいつどのような形であれば子どもたちと子ども会のことのできるのか。地域で集まれといっても、どこにどんな子どもがいるのか分からないとかいうこともあり、その辺をどう整理するのかという問題と学校との連携ですね。場所的なものも含めて、その辺のことも整理しないといけないことでしょうね。

大分見えてきました。子ども会は自治会を辞めたくなるほど世話をしたくないという親の現実があるわけですから、それだけのキーマンが地域で生まれてくれば、また育てることができれば、行政的にはそういったモデル的なところがいくつかできれば、それを基に広めていくということも考えられるかなと

いうふうに思います。

5月の下旬か6月だったか、自治会の会長さんたちが集まる会がありました。その時に多分十数人の自治会長さんに「子ども会どうなってますか」という問いかけをしたところ、「どんどん減ってる」ということでした。「何故減ってるんですか」とい問いには、「やっぱり親がしたくなかけんさ」ということで、「地域の子ども会を自治会でしてみる気はないですか」みたいな話をしました。いくつかの町の自治会長さんは「よかね」というような反応があって、ほんの一つか、二つか、三つか、そういうところが生まれてやっているとすれば、モデルになるのかなと思ってるんですね。先ほど「地域づくりとしての意味」というのがありましたけれども、今地域の自治会長さんが頑張っているようなことを、次の世代は今の子どもの中から地域を大事にするような子を育てないといけないのではないのでしょうかということ、子ども会そのものの意義よりも地域づくりのことで自治会長さんに語り掛けをしましたけれど、いくつかの反応があったので、皆さんの色々なご意見を参考にしながら、生涯学習課長とも相談しながら具体的に考えていきたいとしたいと思いますし、そのことについては今後も定例教育委員会等の折に、駄目でしたという報告になるか、ここまできましたよという報告になるか分かりませんが、試行錯誤させていただいてみようかなと思います。

ぼんやり考えていたことも、今日、皆さんのお話の中でたくさん見えてきました。ありがとうございます。

残りの時間もわずかとなりました。放課後子ども教室まで行けるかどうか分かりませんが、説明をしてもらいましょうか。

○ 生涯学習課長

放課後子ども教室について説明をします。資料では放課後子ども教室とは何か。特に、生涯学習課が担当しております放課後子ども教室と、健康福祉部のこども支援課が担当しております放課後児童クラブ、いわゆる学童との違いは何かについて記載しております。

放課後子ども教室は、学童とは異なって親が仕事をしていない子どもでも対象となりまして、地域の大人たちの協力によって学習や運動、交流活動をする場です。地域の大人と関わる中で社会のルールを覚えたり、多種多様な体験活動をしたりしながら子どもたちが成長し、地域に顔見知りが増えることで安心感を得ることができて、地域の大人、特に高齢者にとっても生きがいになる、そういう仕組みだと思っております。

ただ、どちらも放課後という言葉が使われていてなかなか違いが伝わっておらず、例えば放課後子ども教室の募集をだすと、週にたった2日しか預かってくれないのですかというようなお問い合わせもいただきます。現在、諫早市では田結公民館、森山公民館、遠竹小学校、西諫早小学校で実施をされていて、一部県の補助金を利用し運営しているのですが少ないという状況になります。

市内の学童クラブについては資料に一覧表を載せていますが、現在、諫早市では放課後子ども教室の支援というのは学童がない地域に限っていたという経緯もあって、あまり放課後子ども教室というのが広がっておらず、実際にその存在もあまり知られていないという現状があります。この放課後子ども教室については、もっと教室の良さとか価値を伝えていく必要があるかなと思っており、あと学童との連携ですね、遠竹は今年度から学童ができたのですけれども、放課後子ども教室が終わってから学童に行ったりされているという状況があると聞いています。そういう連携も考えていかなければいけないかなと思っております。以上です。

○ 教育長

非常に難しい内容なので、なかなか分かりにくいのかなというふうに思います。神戸の子どもの殺害事件があって、子どものことが見えなくなっているということで、もっと地域の大人が子どもに関わらないといけないということで、地域子ども教室というのが平成16年度から始まりました。平成18年度まで3カ年間。その後文科省と厚労省が手をつないで放課後子どもプランという形で放課後子ども教室ということになりました。内容については、先ほど説明があったとおりで、子ども会と違って地域の大人たちが子どもたちにこういう体験をさせてやろう、こういうことをしてやろうという、地域が準備して子どもに体験させる、学ばせるというシステムなんですね。子どもの主体性云々という部分だけを取り除けば子ども会と同じように、地域の人が地域の子どもの育てるという意味では似たようなものがあるかと思います。このことについては少し論議があるところでして、またの機会にできればと思います。

とはいえ、子ども会については方向性も見えてきましたので、本当にありがたかったと思いますし、基本的な考え方ということについても協議していただきましたので、それに基づいて今度から具体的な取り組みを報告できるようになればいいなと思っていますところでは。

宮本市長、最後にご感想をいただければ。

○ 市長

難しいですけど、“保護者”というじゃないですか。“保護者”の概念は何かというと、多分ご両親だろうと思うのですけれども、そうとは限らなくていいのですよね。今、三世代で住むというところは非常に少ないと思います。核家族、私のところもそうなんです。夫婦で住んでいて近くに子どもが、まだ小学校に行っていない孫2人というんですけど、すぐ近くなんです。そういう世帯というのは結構いらっしゃるのではないかなと。同居はしたくない。そういうところで、ご両親は保護者で時間的な余裕はないけれども、おじいちゃん、おばあちゃんだったら少し時間的な余裕があるというようなところを活用して、それが自治会活動とか何とかかにつなげていけないのかなと。自治会でやってくださいよといっても取っ掛かりがないとなかなかできないのではないかなというふうに思いますので、何か一つそのようなことを考えられないのかなと思いました。以上です。

○ 教育長

ありがとうございました。元気な高齢者が元気であるように子どもたちのために活用させていただいて、語っている分には希望が見えてきますし、何とかかなりそうな気がするのですけれど、現実的にはかなりハードルが高い問題だと思います。

今日は、社会教育という立場から子どもたちのことについて一緒に考えさせていただきました。ハードルは高うございますけれども、何らかの形で具体化できるようにしていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。